

研究者リーダーシップ・プログラム

「第2回 キャリアについて考える」参加レポート

研究者リーダーシップ・プログラム「第2回 キャリアについて考える」では、菊池先生と財津先生からお話を伺いました。先生方ご自身の経験に根差したお話しでしたので、リアルに想像することができました。全体として、気持ちの切り替え方や、他人の目を意識しすぎてはいけない点など、改めて学び励まされる部分が多かったです。

菊池先生のお話しでは、タイムマネジメントに関して、断ることの大切さに関するお話しが印象に残りました。菊池先生ご自身のキャリアのなかで、頼まれたことにはきちんと対処しようとする限りなんでも引き受けていたけれど、なんでも引き受ける人だと思われてしまうと些末な作業が膨大に降ってきてしまって時間に追われてしまうため、適度に見極めて断ることも大切だというお話しでした。これは、年齢や経験値の違い、ライフステージの違いなどによるものではないかと感じました。まだ若く身分も安定しない時期には、経験を積むためになんでも仕事を引き受け、人間関係を築いていくことがキャリアアップにとって大切だけれど、ある程度土台ができ、テニユアの身分になって職の不安がなくなり、人間関係の構築ができてきた時期になったら仕事を選ぶことができる、という風に理解することもできるのではないかと感じました。しかし、もし下積みの時期に子育てや介護など多忙なライフステージが重なると、むしろ仕事を任せてもらえない、下積みの経験ができないという状況になってしまうケースもあるように思います。特に、産育休やその後の子育ての時期に仕事をセーブせざるをえない状況や、「配慮」として周囲がはじめてから仕事を割り振らないという状況は若い研究者にしばしば起こると思いますが、そうした状況からいかにしてキャリアアップするのか、という点について考えさせられました。同期や後輩たちが既に経験していることを自分はまだ担当させてもらえていない、という辛さ(また、そもそも若手になら何でも雑用を任せてよい、という考え方は)個人の問題ではなく構造的な問題だと思いますので、そういった社会構造の問題点について考えさせられました。

財津先生のお話しでは、その点子育てとご研究に関わるお話しがありました。「休日はしっかり休んで子どもとの時間を作り、研究に集中すべき時は集中する」というお話、いつも両者を切り分けがたい自身を振り返るきっかけになりました。ただ、実際に子育てをしていると、仕事の時間に子どもが熱を出し、持ち越してしまった仕事を休日にこなさざるを得ない、ということが頻発し、休日＝子どもの時間、平日＝仕事の時間、という風にきっぱりと切り分けることが困難です。自分の研究だけに集中できる、ごく稀に訪れた機会に短期集中で作業するほかないのだと思いますが、これもまた個人の能力の問題というより社会の構造的な問題に根差していると感じました。

お二方とも、そこにある様々な制約のなかで生き抜いてこられた先達として考えさせられることが多くありました。同時に、それを個人の能力とのみ位置づけるのではなく、背後にある社会構造についてのお話しもセットでしていただければより深い学びになったのではないかと感じました。そうすれば、「キャリアアップが順調にいかないのは自分の振る舞いがよくないせいだ」という感情から

脱却できるのではないかと感じました。

(堀江未央・岐阜大学地域科学部 准教授)